

〈IASL 年次大会参加報告〉

第37回 IASL 年次大会から知った 「読書」の大切さ

具 島 美佐子

1、成田（日本）からパークレー（米国）へ

IASL（国際学校図書館協会）の第37回（2008年度）年次大会は、カリフォルニア州立大学パークレー校のクラークカーキャンパスで、8月3日（日）～7日（木）にかけて開催された。参加者は約200名で、その半数以上は米国とカナダからの参加で、日本からの参加者は私も入れて7名であり、内2名が発表者であった。大会のテーマは「学校図書館を通じた世界規模の学習とリテラシー」（“World Class Learning and Literacy Through School Libraries”）⁽¹⁾であり、カリフォルニア州のアーノルド・シュワルツネッガー知事の祝辞がプログラム巻頭に掲載されている。

8月1日（金）成田16：05発のUA838で、サンフランシスコに着いたのは現地時間の朝の9時であり、時差は16時間、飛行時間約8時間55分であった。出国の際、成田ではパソコンをケースから出して税関を通らなければいけなかった。到着したサンフランシスコの空港では、入国手続きの最後に米国への渡航理由を聞かれた。そこで、若い黒人の審査官にIASLに参加のことをゆっくりと英語で告げるとびっくりしていた。空港からのドライバーの若い女性は両親共に日本人だが、米国で大学教育を受け、その後旅行社の仕事等を行ってきたとのことである。専攻は日本語学で、その科目担当の先生が少ないのでなかなか卒業できなかったと語ってくれた。ベイブリッジを通りパークレー市内に入り、クラークカーキャンパスに到着した。途中、日本車が多いことに気がついた。トヨタ・カムリ、ホンダ・アコード等であった。



パークレー校のある Warring 2601の住居表示

校内に設けられていた ISAL の大会本部でチェックインを済ませ、宿舎のヘレン・ケラー・センターの1階の部屋へ入り、1時間後に日本から到着した眞鍋由比氏（神戸松蔭中高）と邂逅した。しかしまもなくお互いの鍵番号が「118b」であることに気づき、少し不安になった。彼女が荷物を置いた「118a」の鍵はもしかしたら、別人にわたされるのではと思った。そして私の予感どおり、2、3時間後に香港から到着した母と娘の二人連れが「118a」の鍵をもって入ってきた。私たちの考えていた二人用の部屋ではなかったのである。四人用二部屋の部屋と考えた方がよかったかもしれない。しかしこの人たちも部屋がなければ大変なのである。すぐに私たちは、打ち解けた。おおかさんの方は香港で学校司書をしておられる方、またお嬢さんの方は米国の大学に在学中とのお話であった。部屋にはバスもなく、シャワーがあるのみであったが、朝が涼しく湿度の少ない気候であったので、それほどの不都合もなかった。これらのことは、米国での一つのよい体験として過ごそうと心に決めた。

2、パークレー市内の書店

午後6時からの夕食会も中止ということで、私たちは市内で夕食をとり、未だ明るいので、商店街を歩いて宿舎に帰ったが、途中に新刊書と中古書の双方を扱っている書店に入った。日本とは異なる出版流通界の仕組みである。しかしここでの税率は8.75%で、日本の5%よりも高かった。私は中古書の書棚に目を向けた。そこは著者別に整理されており、ソートン・ワイルダー

(Thornton Niven Wilder 1897-1975)の『サン・ルイス・レイの橋』(“The Bridge of San Luis Rey”)⁽²⁾を探し出すことができた。私の購入したものは2003年に出されたものであった。さらにこの本の近くには日本の作家の英訳された作品が並べられていた。著者記号が「Y」のそれらは次の3点であった。時間がなくて、他の日本の作家の作品を調べることができなかつたのは残念であった。

吉行淳之介『暗室』(“The Dark Room”)

よしもとばなな『とかげ』(“Lizard”)

吉村昭『遠い日の戦争』(“One Man’s Justice”)

『サン・ルイス・レイの橋』を購入できたことはとても嬉しかった。そしてこの出版流通形態ならば、現在の日本でよく言われることである「書店に行って読みたい本がない」という事態も少しは緩和できるのではと考えた。また「Y」の書架だけであったが、現代の日本の文学作品が米国で愛好されていることを実際に知ることができた。



市内の書店：Moe's Books

『サン・ルイス・レイの橋』と私との出会いは38年前に遡る。この本は学生時代の購読のテキストでもあった。当時の私は十代の後半であり、東京の西部のキリスト教系の短期大学に在学していた。そこにはチャペルもあり、礼拝が毎日行われていたが、私は特に礼拝に出ることもなく、大学周辺の雰囲気を楽しむような生活を送っていた。購読の授業は、得意ではなかったが、

この作品に触れることで授業が楽しみになった。作品の内容は、1714年のペルーの首都リマが舞台であって、橋の陥落事故の死者5人の「生と死」のドラマであり、彼らの死の背景に神の摂理があるかどうかと思いをめぐらす修道士が語り手を助けている。さらに死者たちの周辺には総督やその愛人の女優などが存在していて、これらの小宇宙の中の人間の営みが克明に描かれている。1927年に書かれ、1928年にはピューリッツァー賞（小説部門）を受賞しており、最後の部分には次のような記述がある。

“Even memory is not necessary for love. There is a land of the living and a land of the dead and the bridge is love, the only survival, the only meaning.”

私見では、「愛」には最終的には記憶ですら必要がない、生の世界と死の世界の間をつなぐもの（橋）が残って行って、そこに「人間の愛」という意義が存続するというテーマが書かれている。この本についてはその後も度々思い出すことも多く、そのテーマは気がつかないうちに私の価値観の一部ともなっていた。読書とは本を押しつけられて感動するのではなく、自然と自分の中の一部となったものへの感動ではなかろうか。勿論私の学生時代の友人の全てがこの作品に感動したかどうかは分からない。どのようなものに感動するかはその人の精神の自由でもある。「この本のこういう部分を読んだら、絶対にこういうふうに思わなければいけない」という人間の魂への外部からの侵食は、いかなる場合も許されるべきではない。

3、プレカンファレンス・ツアーとワークショップ

8月2日（土）にはプレカンファレンス・ツアーがあり、バスでパークレーからサンパブロ湾に沿って北上し、ワイン工場の見学、そして工場のガーデンでの昼食でくつろぐことができた。午後は南下してレッドウッド高等学校図書館（<http://rhsweb.org/library/>）を見学した。この図書館は今大会の参加者、トマス・カウン氏がスクール・ライブラリアンを勤めておられ、他に4人（ライブラリアンを含む）が勤務している。蔵書は35,000冊位で中央

の低書架にはフィクション6,000冊以上が著者記号順に排架され、窓際の高書架はDDCによって排架されている。また壁の上部には生徒が読書感想画として制作した英米文学の古典作家の肖像画が掛けられ、文学史の学習が図書館という空間で直接的に展開されている。主な作家はオーウェル、ディケンズ、ポー、ワイルド等で、古典文学への関心が自然に養われる効果的な方法と評価できるものである⁽³⁾。



中央がディケンズの肖像

日本文化については、スティブン・ウォールショの著作“Japan Emerges: A Concise History of Japan from Its Origin to the Present”等の蔵書があった。

見学後の帰路ではゴールデンゲート・ブリッジを通ることができた。美しく広がった海に私たちは思わず声をあげた。この巨大な吊橋の建設は1933年に始まり、1937年に開通した。橋梁は実際にはオレンジ色であるが、付近の海峡が金門 (Golden Gate) といわれているので、ゴールデンゲート・ブリッジ (Golden Gate Bridge) と名付けられた。公的な記録では明治4年 (1871) 12月6日に日本の岩倉使節団が金門を通過している。「景色ウルハシハ、是ヲ名ニヲフ金門 (英語ニテ「ゴールデンゲート」) ト云処ナリ」⁽⁴⁾ という記述もある。現代の私たちよりもさらに深い印象を持ったと思われる当時の日本人の感動の様子が推測できる。

3日 (日) にはプレカンファレンス・ワークショップが午前と午後に分かれて開催された。私が参加した午前中のブックトークのワークショップでは、テリー氏によるデモンストレーションが行われた。テリー氏のお話ではブッ

クトークを行う際には、実物の本を教室に持ち込まないで、アマゾンからの書誌情報をダウンロードしたパソコンを使っておられるとのことである。同氏はまたフリーリーディング（黙読と自由選択読書）が主要な内容であるイングリッシュリーディングの教諭であって、勤務先の高校では歴史の時間にも担当教諭の依頼でブックトークを行い、読書力の向上を育成しているとのことである。また実演の際の出発点となる本の選択では、小学生は絵本、中高生ではグラフィックノベル（Graphic novel）、大学生には古典文学がふさわしいと同氏は述べておられた。

私はこのワークショップに出席をして、米国では教諭による授業の中でのブックトークから、生徒の学力や情報活用能力の向上が養われていることを初めて知った。米国の学校教育の中で、教諭のブックトークによる読書指導は、教科指導と密接に関わっているという考え方も可能である。最後に、ブックトークの意義については、読書力の向上であるということが、参加者の共通した意見であった。関連のサイトの紹介もあった⁽⁵⁾。

午後のワークショップでは、デビットロチェスター氏による“Beyond“Bird Units”: Models for Deeper Research Projects in School Libraries”に参加した。

4、基調講演と大会風景

4日（月）からクラークカーキャンパスの中で朝食もとれるようになった。言葉の壁には遭遇したが、カンファレンスには次第に適応していった。朝の開会式では、スティーブン・クラッシュェン氏が基調講演を行った。演題は“Do Libraries Matter?”であった。その概要は、リテラシーの要素は読解力の得点と確かに関係があるが、統計的に意義のある段階には未だ達していない。社会的経済的階層に基づく家庭と学校図書館との連携からは61%の変化が認められて、この数字は10年前の調査結果に近く、図書館の意義の重要性は明白というものである。講演終了後には、日本からの参加者でクラッシュェン氏の著作『読書はパワー』（“The Power of Reading”）⁽⁶⁾の訳者・長倉美恵子氏⁽⁷⁾も壇上に登られた。

午前中には松戸宏予氏のプレゼンテーションも行われた。演題は「特別な

教育的ニーズをもつ児童生徒に対する学校司書の期待される援助—修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチを用いて— (“School librarian’s anticipated support for students with Special Education Needs (SEN): Using a Modified Grounded Theory Approach”) であった。またこの日から大会の展示用のガーデンルームではオークションの他、各国参加者が持ちよった YA 向けの本の展示が開催された。日本の参加者からの展示本は、『図書館戦争』、『母べえ』、『ヨウカイとむらまつり』等であった。また米国



YA の本の展示

からの出展らしい “Heroes Don’t Run: A Novel of the Pacific War” という本も展示されていた。そしてルームの中央では、IASL の設立に尽力なさったジーン・ロウリイ氏が、90歳近いお年を感じさせない元気なお姿を見せておられた。



ジーン・ロウリイ氏

4日の夕食の際に、私は隣り合ったスウェーデンからの参加者に『ハリー・ポッター』シリーズについての印象を伺った。彼女は児童生徒に良い本であると答えて、米国人についてはものの考え方が因襲的であると批評した。するとその話を聞いていた米国人の方が『ハリー・ポッター』シリーズの裁判が現在米国で3、4件あることを教えてくださった。この方はわざわざ別のテーブルに座っていた友人に件数の確認をしてくださった。勿論、悉皆調査ではないので、大雑把ではあるが『ハリー・ポッター』シリーズは、学校図書館関係者の間では評判はよい本であることを把握できた。

その後、午後7時から8時半にはストーリーテリングのパフォーマンスがキャンパス内のシアターで行われた。出演者は共に米国のキャロライン・デューク・アレクサンダー氏とダイアナ・デ・ラ・カサ氏であった。アレクサンダー氏は西海岸の湾岸地域では最も活躍中の黒人のストーリーテラーであって、エネルギッシュな演技をみせてくれた。その内容はまず『アラビアン・ナイト』から始まった。『アラビアン・ナイト』の語り手であったシェラザードの話には或程度の脱線が組み込まれていた。さらにカンタベリー物語の中のアーサー王の話や、私が初めて耳にしたメキシコの伝承らしいイザベールとラファエルの話などが印象的であった。またデ・ラ・カサ氏は紙切りのデモンストレーションを行った。最後の一般の参加者によるパフォーマンス「アメリカ版大きな“かぶ”」には私も一匹の「猫」として参加し、実際に猫の声をまねて「ニャーオン」と発した。



左端は「猫」

5日には日本の中村百合子氏の「生活指導の一環としての読書指導—1940年代に滑川道夫が成立させ日本で普及した滑川道夫の読書指導論」(“Reading Guidance as a part of Guidance”: A popular philosophy of reading guidance in Japan developed by Michio Namekawa in the 1940s)のプレゼンテーションも行われた。

夕食会では地元カリフォルニア州の中高生が出演したエンターテイメントがあった。彼らや彼女らの肌の色は異なっていたが、黒人のリーダーの元にまとまっていた。しかし同じテーブルに座っておられた地元カリフォルニア州の学校司書のお話から、高校中退者が多いこと、その要因は「貧困」にあることなど彼らの状況が厳しいものであることを知った。私も、私の隣席におられた香港の学校司書の方も高校中退者が勤務校に殆どいないことなどを伝えると、カリフォルニア州の学校司書の方からは、それは大変うらやましい状況であるという意味の返事が返ってきた。そういう状況下ではあるが、日本の米国大使館のサイトでは、「米国の教育—教育政策と現状」という項目に次のような記述を掲載している。

2000年には米国では3歳児以上の4人に1人以上が学校に通い、教育はきわめて日常生活の一部になっている。2000年における7680万人の学生生徒の内訳は、保育園児500万人、幼稚園児420万人、小学生3370万人、高校生1640万人、大学生(学部生)1440万人、大学院生310万人となっている⁽⁸⁾。

米国全体という「総論」では教育が大変普及しているとされていても、カリフォルニア州という「各論」では貧困が中等教育を直撃していることが推察できる。日本の東京都の場合では、平成20年度の私学助成関係予算が約1,343億円であり、高校生の場合月額で約30,660円相当の学納金等の父母負担軽減に役立ったとされている⁽⁹⁾。カリフォルニア州と比較の対象となる資料ではないが、中等教育に関しては、東京都はまだまだ恵まれた財政状況と判断できるのである。



カリフォルニアの高校生

5、公共図書館と大学図書館

8月6日午前中に、私は同室の眞鍋氏の案内で、サンフランシスコ公共図書館の中央館（<http://sfpl.lib.ca.us/>）を訪れた。現在の7階の建物は1996年に完成され、20以上の分館がその傘下にある。1階のカウンターで総合的なレファレンスが行われ、貸出用のカウンターは別にあり、閉架用のカウンターもあった。



図書館の内部

分類はDDCで、閉架用のカウンターはあるが、レファレンスと貸出用のカウンターは同一であった。また8月13日にはネットによる求職者の講習会が開催されるというチラシを目にしたが、そこには図書館と地域社会との強力な連携が感じられた。

『サン・ルイス・レイの橋』を探しているという私に対して、カウンター

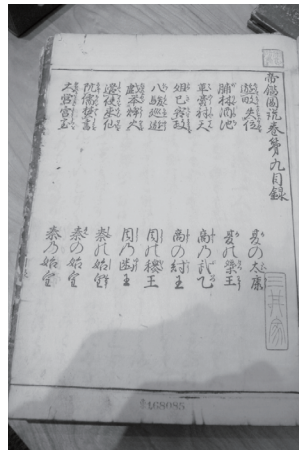
の司書の方は適切な支援をしてくださった。私はまず『サン・ルイス・レイの橋』を端末で検索し、それがCD化されたり、分館にも所蔵のあることを知った。さらに閉架用のカウンターの司書をお願いをしてその初版本を閉架書庫から出していただき、まだ読み継がれている本なのだという結論に達したのである。初版は80年以上前の1927年に出されており、日本でもその頃に刊行された作品、例えば「河童」(芥川龍之介)、「冬の日」(梶井基次郎)や「ルウベンスの偽画」(堀辰雄)等⁽¹⁰⁾が学校図書館で所蔵され、借りる生徒がいること思い出した。



1階のカウンター

カウンターの中央にいる起立している女性は、司書歴25年の専門職であり、司書としての心構えについて、“Find information need people asked”と語った。次に訪れるかどうかは分からない、アジアからの来訪者である私に対して、彼女は暖かく接してくださったのである。

午後からキャンパスに戻り、バークレー校内の東アジア関係図書館(C. V. Starr East Asian Library)の見学に参加した。ここでは主に日本、中国、朝鮮関係の資料が収蔵され、見学の参加者は東アジアの関係者が大部分であった。貴重書のコーナーには日本の明治期の教科書『女徳唱歌』(遊戯叢書第二編)や三井家の所蔵であった『帝鑑圖説』(第二函)等が展示されていた。



『帝鑑圖説』（第二函）

また一般の書架ではLCCに従って日本語、中国語、朝鮮語の蔵書が言語の枠を超え、主題別に排架されていた。一例を挙げれば、『多選択肢社会を解説する』（井原哲夫／著）の隣には『中国公共品市場と自願供給分析』という中国書が並んでいた。

6、大会終了

大会に参加して、多様な参加者たちとの交流により、グローバルな視点から学校図書館の活動の趨勢を把握できたことは大きな収穫であった。『ハリー・ポッター』シリーズの裁判もある米国ではあるが、このシリーズに対しての学校図書館側の見解は概ね好意的であることが推察できた。生徒に悪影響を与える心配はないという意見を参加者たちから得ることができたからである。「魔法」や「異教」を伝統的な価値観だけを背景にタブー視する姿勢が徐々に弱まっていく様子を感じることができた。今回のテーマである「学校図書館を通じた世界規模の学習とリテラシー」の向上を図ることに対しては、フリーリーディングの授業やブックトーク等によって開催国の米国では学校関係者が既に取り組み、世界的な動向としても英国では公共図書館によって学校図書館が支援され、児童生徒の学習とリテラシーの向上への取組が展開さ

れている⁽¹¹⁾。

次の2009年の年次大会は、イタリアのパドゥバ (Padova) で、9月2日～4日にかけて開催される予定である。実はIASLの大会が日本の学校の夏休み中に開催されることは稀なことなのであった。日本からの参加者からは今度はいつ大会に出られるか分からない、せめて今回だけでも出席できてよかったという声が聞かれた。大会役員のジャン・ジェイ氏 (米国) にも開催を7月下旬から8月下旬にしてほしいと、一応のお願いをしたのであったが、米国が組織の主体であるIASLの年次大会が、米国の夏休みに合わせて開催が計画されるのはやむを得ない状況かもしれない。

7、帰国して

児童生徒の活字離れや読書離れが指摘されて久しいが、最近では総合的学習や調べ学習が盛んとなり、日本の学校図書館は教育課程の展開に必要なものとされつつある。日本の学校では国語の学習指導の中でフリーリーディングという科目を独立させていることは少ない。若干の私立学校にフリーリーディングと類似した読書科が設けられている程度である。それ故に現在でも小学生よりも中学生の方が「不読者」の割合が多くなる状況も報告されているが、「読書が好き」な児童生徒の割合は小学生と中学生との間で大きな違いがないという状況も把握されている。読書好きな中学生は小学生ほどではないが、勉強やスポーツの合間に読書時間を確保しているらしいと推察され、今後の学校図書館には読書の習慣付等への支援が期待されているのである⁽¹²⁾。平成13年(2001)には「子どもの読書活動の推進に関する法律」が制定され、また学校図書館の専従職員によるブックトークやストーリーテリングが全国的に浸透し、「朝の読書」も活発となっているのが現況である。

過去の時代においても、児童生徒の読書を質的に向上させるような学校側の取り組みがあった。私が中学生であった昭和40年(1965)から43年は、現在よりも図書館の予算が乏しい時代であった。出身校である千葉大学教育学部附属中学校にも図書館専従の職員はいなかったが、そこではまた唯一の図書館行事として全学年参加による「読書会」が秋の読書週間の頃に行われていた。読書会については、「学校では読書指導の一つの方法として位置付け

られている。」⁽¹³⁾という評価がある。さらに読書会と一体となった「集団読書」については、「その形式として、(1) 回し読みをする、(2) 個々に同じ本を読む、(3) 自由に読みたい本を読む、などがある。」⁽¹⁴⁾とされている。私の体験した中学校の読書会は(2)に該当しており、個人読書のマイナス面を補う学校側のねらいがあったと考えられる。

私の中学校の読書会の場合では課題図書は全校共通の一冊であり、それについて生徒会の時間等に学年を超えた話し合いが図書館で開催されたのであった。課題図書は各自購入するように指示されたが、中学生のお小遣いで購入できるくらいの価格であり、二年生の時の課題図書が『ベートーヴェンの生涯』⁽¹⁵⁾であったことは鮮明な記憶である。この本は極めて難解であったが、西欧の芸術家の不屈の魂を私たち中学生に提示してくれたのであった。またクラス担任の紹介による『自由と規律』⁽¹⁶⁾も、英国のパブリックスクールの生活を知るといって有意義な本であった。自由と放縦との違いは背景に規律があるかないかによって決定されることを教えてくれたのであった。これらの二冊の本は私の欧米世界への関心を深めたが、これらの本が現在の中学生に必要な本であるとは考えてはいない。また現在では一つの学校で一つの課題図書を採用し、生徒全員に購入させることには問題もあろうと考えられる。しかし私見では出身校の読書指導は昭和40年代の前半としては、生徒の精神世界の成長を促した試みであったと感謝している。

高校に進学してからの私はドストエフスキーやショーロホフのようなロシア文学も読んだが、ディケンズの『二都物語』やメルヴィルの『白鯨』等の英米文学、バルザックの『従妹バット』やスタンダールの『赤と黒』等の仏文学に親しむことが多かった。そして日本の近代文学では外国を舞台とした森鷗外の『舞姫』や永井荷風の『あめりか物語』等に読書の幅が広がった。さらに短大では購読のテキスト『サン・ルイス・レイの橋』を読むことで、「その静かで瞑想的な作風」⁽¹⁷⁾の一端に触れることができたと考えられる。

学校図書館に職員も配置されない時代にはブックトークやストーリーテリングも普及していなかったので、大多数の生徒が個人の選択による読書の積み重ねによって、読書を深化させていったと推測できる。しかしそのような状況下でも学校側に読書会等が実施された場合は、個人読書ばかりでなく、

集団読書によって読書領域の広がりを生徒は体験することもできたのであった。私個人は読書会での『ベートーヴェンの生涯』や、購読のテキストであった『サン・ルイス・レイの橋』のような教師の薦めた本からの影響も深いものがあったことを体験した。こうした体験から、学校や学校図書館が生徒の読書履歴の基盤作りに果たす役割は大きく、学校教育と共に永続的なものと考えられるのである。そのような視点から、現在の中学生在がよく読んでいる『ハリー・ポッター』シリーズも、三十年から四十年後には彼らや彼女たちの脳裏で、中学生時代の鮮明な記憶として思い出されることと推測できる。生徒個人の読書履歴の基盤作りを支援することが、学校図書館の存在する重要な意義でもある。また個人読書を補完するためには、「朝の読書」のような学校単位の取り組みとしての集団読書の推進も望まれることである。

第37回 IASL 年次大会に出席できたことで、私は自分自身の乏しい読書の体験を通じて学校図書館の役割や小中学生の読書の意義を再確認することができた。そして大会やその周辺地域でお目にかかった全ての方々に、国籍に関わらず厚く御礼を申し上げたい次第である。

注

- (1) 大会のテーマの日本語訳については、『学校図書館』（2007年11月号／通巻685号）掲載の須永和之「台湾の学校図書館」（第36回 IASL 年次大会報告〈2〉）参照。
- (2) “The Bridge of San Luis Rey”, Perennial classics, Harper Collins Publishers Inc. New York, NY, 2003.
- (3) レッドウッド高校図書館については『あうる』2009年2、3月号（『NPO 図書館の学校機関誌』通巻87号）の「国際学校図書館協会年次大会にて—その③」（長倉美恵子）に詳細が掲載されている。
- (4) 久米邦武編『米欧回覧実記（一）』岩波文庫 2002年6月14日 p.75。
- (5) 〈<http://teacher.scholastic.com./products/tradebooks/index.html>〉（2009年2月参照）
- (6) “The Power of Reading: Insights from the Research” の初版は1993年刊、第2版は2004年刊。

- (7) 長倉美恵子訳『読書はパワー』（金の星社）は初版の翻訳で、1996年刊。
同氏の論考には「スティーブン・クラッシュェンの読書指導論— *The Power of Reading* の初版と第2版との比較—」（『学校図書館学研究』vol.8 2006年3月）もある。
- (8) 〈<http://aboutusa.japan.usembassy.gov/j/jusaj-education-policy.html>〉
（2009年2月参照）
- (9) 『父母の会ニュース』第57号（東京都私立中学高等学校父母の会中央連
合会発行）参照。
- (10) 三好行雄編『近代文学史必携』（別冊國文學）學燈社 1987年1月10日
p.175参照。
- (11) 英国文化・メディア・スポーツ省編 永田治樹・小林真理・小竹悦子訳
『将来に向けての基本的考え方：今後10年の図書館・学習・情報』日本図
書館協会 2005年6月20日 p.31参照。
- (12) 「これからの学校図書館の活用の在り方等について」（審議経過報告）『学
校図書館』（2009年2月号／通巻700号）p.63～65参照。
- (13) 『図書館情報学用語辞典』第3版 丸善 2007年12月25日 p.171。
- (14) 『最新図書館用語大辞典』柏書房 2004年4月30日 p.209。
- (15) ロマン・ロラン著 片山敏彦訳『ベートーヴェンの生涯』（改版）岩波
文庫 1965年4月16日。
- (16) 池田潔『自由と規律』（改版）岩波新書 1963年6月20日。
- (17) 『英米文学辞典』第3版 研究社出版 1996年4月25日 p.1473。

（ぐじま みさこ。櫻蔭中学・高等学校図書室司書）